

畏友・斉藤斗志二氏と従兄弟の斉藤喜一郎政策アドバイザーが、お世辞ではなく、本当に見識とセンスにあふれた新著を出された。

私は、いわゆる“政治家本”は、あまり読まぬのだが、この良著だけは、むさぼるように一気に読みしたのである。なぜ“むさぼるように”という心理になったかは、みなさんがこの本を読み始めてさえ下されば理解できるとはちがいない。

私が斉藤斗志二氏と初めて会ったのは、彼の日本JC会頭時代、彼が臨教審委員、私が文部政務次官という立場のときで、斉藤斗志二氏の眼光の鋭さに驚いた記憶がある。あの何物かを見通そうとするキラキラと輝く眼の光は、今も全く変わっていない。本書を読んで、私は彼が見通そうとしているものの正体を知

った気がする。このままでは、この国も日本人も非常にあやうい。どうやって日本という国を存続させ、そこに住む日本人を立派な人間にしていくことができなのか。彼はそれを見通すためにJC時代から大臣を経て今日まで、一貫して眼力を養ってきたのである。そして彼と喜一郎氏が、ついにとらえた国のかたちこそ「一国の独立を堅持する強い国家意思を持ち、卑怯を許さない大和魂を持つ人々が住む、豊かさを実感できる国」だったのである。

政策を積み重ねさえすれば理想の国家ができあがるわけではない。すぐれた政策を多数実行しても、「合成の誤謬」が起こり、国家が衰退していった例も多い。あくまでも理想の国家像や社会像が先に描かれていなくてはならぬ。二人

の斉藤氏はそれを見事に描いている。それは、もはや斉藤哲学、斉藤文明論と言ってもいいのではないか。目指すべき山頂を見つめてから登山道を探すのが正攻法というもの。彼らの論法は、その形をとっている。理念型から逆算して具体的政策を導く方法論は完璧に正しい。

月額五万円の児童手当の創設は刺激的だ。少子化対策として百や二百もの議論が渦巻いているが、これ一発で勝負できるように思える。未来世代や未来の日本のために消費税を10%にするのであれば、私には納得できる。

私自身が相続税の廃止論を唱えようと、「何だ、鳩山邦夫は自分の為に言っているのか」と批判されてしまうが、斉藤氏の廃止論は充分に説得力がある。そもそもシャウプ勧告は日本を弱体化させる

ための勧告だったわけで、たった一兆円の相続税収で富の再分配ができるはずがないのである。彼らは言う。「富裕層の足を引っ張って没落させるのが格差是正ではありません。低所得層の富裕化が重要です」と。

臨教審委員でもあった斗志二氏は、「ならぬことはならぬ」を徹底して、卑怯者をなくそうと提言する。人作りの基本は決して狭義の学力にあるのではなく、武士道や大和魂に習うべきである。今の文科省の役人たちは、そのことが全くわかっていない、と私は心配している。刑事事件の時効廃止の提言にも大賛成だ。

いまだにGHQの日本弱体化政策が生き続けていることが最大の問題である。「祖国を恥じることが知的態度である

という全く間違つた教えをやめさせよう」——斉藤氏らの提言通り、私たちも行動していきたいと思う。

とにかく久々にいい本を読み、さわやかな気持ちになっている。

衆議院議員

鳩山 邦夫